

近世期ロレーヌ地方の巡礼

長谷川 まゆ帆

日本の四国巡礼との比較を試みるために、ヨーロッパの巡礼の歴史に関わる事例を紹介し、議論の素材を提供すること、それが本合同研究会でのわたくしに与えられた任務であった。フランス近世期を対象に主に17～18世紀のアルザスやロレーヌ、ノルマンディといった王国辺縁部の社会変動を扱ってきたわたくしにとって、巡礼の歴史は以前から気になるテーマであった。とくにロレーヌに関して言えば、この地域の近世史家によって、すでに10年以上も前にまとめた研究書が出版されている。少し眺めてみればわかるように、巡礼の社会史は時間的にも空間的にも広い領域に及び、日常性と政治文化をつなぐ、領域横断的なテーマである。

実際、巡礼研究は社会史や歴史人類学の格好の対象であった。文献のみならず、伝承や儀礼についての調査が必要となる分野である。いわゆる宗教思想史の枠組みにはとどまらないし、民俗史という視点だけではこぼれおちてしまう問題も多い。巡礼は社会から孤立して行われたのではなく、領主や君主、教会や村落共同体と民衆とのやり取り、交換の中でさかんになったり、衰退したり、かたちを変えてきたからである。巡礼はそれ自身が幾重にも積み重なった文化の複合的な産物であり、そこにある人々の心性や振る舞いも不変ではなかった。

フランス語で「巡礼」はペルリナージュ *pèlerinage* と言うが、近世期の巡礼者たち（ペルラン *pèlerins*）の心性や行動は、いったいどのようなものであったのか。人が住み慣れた土地を離れ、見知らぬ巡礼地へと旅立つのは、どのような動機や目的によっていたのか。巡礼を容認あるいは奨励したカトリックの聖職者たちは、巡礼を通じて何を期待していたのか、また彼らの期待と信者の側の思惑とははたして一致していたのかどうか、この時代の印刷術の普及や宗教改革に続くカトリックの改革運動は、巡礼という営みにどのような影響を及ぼし、変化させていったのか、そもそも女や子供は巡礼とどう関わっていたのか。さまざまな問い合わせてきて、興味がつきない。

本報告はもちろんこうした問い合わせに十分答えるものでない。しかしますは事始めということもあり、報告者自身が巡礼や巡礼研究とは何かを知りたいという素朴な願望のもと、ロレーヌ北西部の小さな巡礼地ボリュウ・アン・ナルゴンヌ *Beauleiu-en-Argonne* についてご紹介し、ささやかながらロレーヌの巡礼地の具体的なイメージを描いてみたい。近世期のロレーヌでは一般信徒の巡礼がさかんになるが、彼らは必ずしもエルサレムやローマへの巡礼をめざしていたわけではなかった。17世紀から19世紀に至る時期の農民は、ロレーヌの森の聖地にひきよせられたのであり、そこに頻繁に訪れていたのである。人々が比較的近場の聖地に足を運んだのにはそれなりの理由があった。

次に、巡礼の社会史研究の関心や方法、射程について短く整理し、最後にわたくしの研究にも密接に関わる、17世紀にロレーヌで隆盛を極めたある奇跡儀礼「サンクチュエール・ア・レピ *Sanctuaire à répit*」についてご紹介したい。これは未洗礼のまま亡くなった子供に洗礼を施すための蘇生の儀礼であるが、そこにはキリスト教の死生観からは説明できない身体感覚、時間感覚が内包されている。これについてはロレーヌ北端に位置するアヴィオット *Avioth* のノートル・ダム教会に在職した司祭ジャン・ドロテル *Jean Dehlotel*（在位 1636-1682年）の覚書きがあり、これを参照した。

一. アルゴンヌの森とサン・ルアンの伝説

夏の終わりは、巡礼地を訪れるのに最良の季節であると述べたのは、ナンシー大学教授フィリップ・マルタンである¹。彼は1876年にロレーヌの北西に位置するボリュウ・アン・ナルゴンヌ *Beaulieu-en-Argonne*²を訪れた二人の旅人に言及している。一人はイル・ド・フランスに生まれた作家アンドレ・トゥリエ *André Theuriet*（1833-1907年）であり、もう一人はムーズ県出身の画家ジャン・バティスト・ルパージュ *Jean Bastien-Lepage*（1848-1884年）である。トゥリエはこのときの散策について後に記述を残している。

9月17日のことであった。二人はシャンバーニュからロレーヌに入り、アルゴンヌの森を散策していた。この森は古くからフランス側の官吏や軍隊がロレーヌを横断してアルザスへと至る通路となっていて、現在は高速道路の4番線が通っている。ボリュウ・アン・ナルゴンヌは、その高速道路からさらに10キロほど南に位置する。二人はその森の奥を抜け、そこにある小さな礼拝堂まで来ると、あたりに集まっている大勢の巡礼者に遭遇した。

……ほとんどの巡礼者は色とりどりの服を着た女や子どもであり、カテドラルの中に入ってはしゃいでいる。灼熱の太陽の光が祭壇を照らしだし、合唱隊の子らの赤い帽子と司祭のステン[司祭服]の黒が見事に調和して輝いている。濃青色の粗末な仕事着の農夫たちが、祭壇に向かって恭しく頭を垂れている。そのときである。突如として、貧しい身なりの何十人の人々の口からいっせいに熱くわきあがる「キリエ（憐れみの賛歌）」に、あたりの静寂が破られたのは……。

夏の陽光に照らされた緑の森の、のどかで庶民的な雰囲気、しかしあスピリチュアルでおだやかな空気も伝わってきた。この時代のフランスはすでに普仏戦争やパリコミューンを経て、第三共和政期に入っている。1860年代には鉄道の幹線網が完成していたし、産業革命も軌道にのっていた。パリではセーヌ県知事オスマン（在職1853-1870年）によって都市改造が行われ、1867年には万国博覧会も開催されている。ガス灯が普及し、警察や軍隊も整備され、都市の闇は夜昼問わず消えつつあった。義務教育も施行され、識字率は確実にあがっていたし、新聞や雑誌、小説もいっそう広く読まれるようになっていた。一方、写真芸術や新しい絵画、音楽も花開き、カフェや居酒屋には大勢の人々が集い、新しいレジャーやコミュニケーション手段が都市の暮らしを賑やかで華やかなものに変えつつあった。トゥリエやバステイアン・ルパージュもその新しい都市の光に夢を見出した男たちである。

都市ではこの時代になると、一般庶民の間にも流行服や既製服が普及し、中上流家庭では新しい鍵盤楽器ピアノが女性のたしなみとして普及しつつあった。新聞や雑誌の広告を通じてシンガーの足踏みミシンが月賦販売で一般家庭に浸透し始めていた。また北米で改良されたタイプライターがフランスにも輸入され速記者たちの間に受容されつつあった。電話や電報、蓄音機や自転車、自動車が出現するのはもうしばらく後だが、第三共和政期の政府による非宗教化政策により、一般信徒の宗教観、信仰心は大きく変わり、少なくとも都市では巡礼はもはや遠い過去の記憶となりつつあった。たしかにこの時代にはまだ「巡礼」には一定の関心が抱かれていたかもしれない。都市化や産業化によって消えていく古い文化を採集し記述しようとする好事家があらわれ、各地に考古学協会が設立され、「郷土」や「農村」にノスタルジックな郷愁が向けられていくのもちょうどこの時代以降のことだからである。

この二人の散策者とわたしたちとの間には100年以上の隔たりがあり、巡礼との関わりや距離は同じではない。しかし外部から巡礼を見るという点では共通したものがある。今回わたしは、愛媛大学を中心とする科研グループの方々のお接待で生まれて初めて四国の幾つかの札所をめぐり、巡礼の一端をのぞく機会に恵まれたが、想像はしていたものの、行く先々で出会う巡礼者の姿に何かしらふいにタイムスリップしたような不思議な感慨に襲われた。そのいでたちもさることながら、低い読経の合唱や薬師仏をなでて身を清め、願いを叶えようとするお遍路さんたちの真剣な姿に心を打たれたからである。トゥリエもバステイアン・ルパージュもきっと、目にしたもの耳にしたものに驚き、また森の静寂と光の透明さに心を奪われたことだろう。彼らはこのあと、予定していたわけでもないのに、さらに森の奥へと至る巡礼路にも加わり、サン・ルアン Saint Rouin ゆかりの聖地へと足を運んでいる³。

ところでこのサン・ルアンと呼ばれる聖人はいったい何者なのか。聖人としてそれほど知られているわけではない。トゥリエたちもそのとき疑問に思ったのではないか。そう思って調べてみると、サン・ルアンというのはこの地に初めて修道院を建立した隠棲修道士の名であることがわかった。WEB上に「伝説と現実の狭間で」と題された聖人伝についてのサイト⁴があり、そこに詳しい情報が掲載されている。この記述の典拠となっているのは19世紀に編纂された司教区の聖職録や教会関係者の著作⁵であるが、それらはこの種の聖人伝を歴史学者が調べるときにも基本的な情報源となるものばかりである。サイトの書き手は必ずしも研究者ではないが、伝説を伝説として、つまり構築されたフィクションとみているし、文献に基づいて伝承を紹介し、吟味をしている。ここでは参考のためにそのサイトから得られたサン・ルアンに関する記述を抜粋してみよう。この記述から、19世紀までの教会側が把握していた、あるいは司教や司祭たちが当地の信徒に受容させたいと望んでいた物語の概要を探ってみたい。



図1 サン・ルアンの隠者の館

Saint Rouin aurait été proposé de venir s'installer sur les possessions verdunoises pour y fonder un nouveau monastère vers 640 par un ami de Saint Paul, évêque de Verdun. Et il aurait accepté cette invitation et choisi pour s'implanter, le paisible cœur de la forêt de l'Argonne.

Malheureusement, le calme nécessaire à la prière n'aurait pas été long car Austrèle, le seigneur d'Austrecourt et des lieux où entreprit de s'établir Saint Rouin, serait venu chasser le moine non sans l'avoir fait copieusement fouetter. Saint Rouin obligé de quitter sa retraite serait parti en pèlerinage à Rome, pour aller prier sur les tombeaux des apôtres.

Peu après le coup de force d'Austrèle, le seigneur et sa famille seraient tombés tous gravement malades et rien n'aurait pu les guérir.

Alors qu'il priait à Rome, Saint Rouin aurait interpellé par Saint Pierre du fond de son sépulcre : « Retourne dans ton désert : tu as été battu de verges ; mais le Christ ne l'a-t-il pas été plus que toi dans sa douloreuse Passion ! »

Saint Rouin voyant dans ces mots un miracle, aurait suivi le message du père de l'église et aurait regagné l'Argonne. De retour sur les terres de son sévisse, il guérit l'irascible seigneur en lui faisant boire l'eau de la source à quelques distances du lieu dévolu au monastère.

Austrèle aurait reconnu le miracle du saint homme, lui aurait offert la terre nécessaire à son monastère et serait venu même travailler de ses propres mains à son édification.

Saint Rouin aurait fait rayonner son monastère, et, presque centenaire, se serait retiré dans un petit ermitage voisin, qui porte encore son nom.⁶

伝説の筋書きはこういうことになるだろう。修道士サン・ルアンは、紀元640年ごろ、ヴェルダンVerdunの司教で友人でもあったサン・ポール[聖パウロ]から、ヴェルダンの土地に新しい修道院を建てるよう話をもちかけられた。サン・ルアンはそれを承諾し、アルゴンヌの森の静寂の中に入植地を選んだ。ところが祈りに必要な静寂は長くは続かなかった。なぜなら彼が身を落つけようとしていたアストラシア⁷の君主にして土地領主でもあったアストレーズがやってきて、この修道士を追い出そうとしたからである。彼は激しく鞭打たれ、そこから去ることを余儀なくされた。彼は使徒たちの墓碑に祈りを捧げようとローマへの巡礼におもむく。一方、アストレーズとその家族はみな、サン・ルアンを強制的に追い出した後まもなく深刻な病に陥り、何をしても治らなかった。

サン・ルアンがローマで祈りをささげていると、キリストの聖墓の奥からサン・ピエール[聖ペテロ]が呼びかけてきてこう言った。「おまえは荒野に戻るのだ、そこはおまえが鞭で打たれたところだ。しかしキリストの受難はおまえのそれを上回っていたのではないか」と。サン・ルアンは、これらの言葉に奇跡を見出し、教父のお告げに従ってアルゴンヌに戻った。戻るとまもなく彼は、その短気な土地領主に泉の水を飲ませて病を癒した。その泉は修道院を建てようとしていた場所からほんの少し離れた所にあった。アストレーズは聖人の奇跡を認め、修道院の建設に必要な土地を提供し、自らの手でその建造のために働いた。その後サン・ルアンは、その修道院を拠点に四方八方に影響を与え、百歳近くまで生きたが、彼自身は、近隣の小さな隠者の館に隠遁して過ごした。その館にはいまも彼の名がつけられている。

以上が聖人サン・ルアンの物語の内容である。アルゴンヌの森には、いまも美しい湖があり（図2参照）、近くには彼の名を冠した小さな隠者の館が存在する（図1参照）。ただしサン・ルアンが築いたとされる修道院は13世紀末に火災に遭って焼け落ち、16世紀になって再建されたが、革命期に再び破壊されている。現在はその一部が残っているが（図3参照）、全体の再建には至らず、1950年代にモダンな造りの礼拝堂が建てられているだけである。

この修道士はアイルランドの出身であるという説とスコットランド出身であるという説の二つがあるが、後者は11世紀頃に書かれた聖人伝による情報であり、結局のところより古い記録に基づくアイルランド出身説が有力とされている。こうしたことはすべて教会側の記録に典拠がある。海の向こうの遠いアイルランド出身というのも、7世紀に先進的な位置を占めていたイギリスやアイルランドでのキリスト教の修道活動を考える



図2 サン・ルアンの隠者の館付近の湖



図3 革命期に破壊された修道院の一部

と、事実無根というわけではなく、十分ありうる話ではある。

しかし、こうした物語が7世紀の当初からこのようにできあがっていて、それがそのまま伝承されてきたというわけではないだろう。たとえば、このお話には、修道士を追い出した後、土地領主とその家族に天罰が下ったのか、彼らが重篤な病に陥るというくだりがあり、修道士が戻ってきて近くで汲んだ泉の水を飲ませると病が治るという奇跡が起こり、そのことが修道士とこの土地の所有者との関係を転換する重要な契機となっている。こうした泉の水への信仰は、それ自体、キリスト教の枠組みの内部にもともとあったものではない。泉の水の効能にまつわり以前から共有されていた地元住民の信仰が、聖人伝に結び付けられているのである。実際、ゲンルマンの土地への初期の布教は強い抵抗に遭っていたのであり、殉教者も多く、キリスト教化には長い年月を要した。

司牧にやってきた修道士はまずは土地の言葉を覚え、そこに生きる人々の歴史や慣習を学び、人々の信じる民間信仰を吸収していかなければならなかった。そう

でなければ、キリスト教をその土地の住民に広めることはできなかつたからである。キリスト教化の運動とは、こうした先行する土地の文化と衝突しながら、長い苦難の末にそれらを吸収し、そこにキリスト教的な意味を付与して与えなおすという、いわば回収récupérationの過程でもある。こうした積み重ねの中で徐々にキリスト教は生活の中に根付き、地歩を築いていったのである。サン・ルアンの聖人伝も長い司牧の過程で徐々に練り上げられてきたものであり、筋書きは入植した聖職者たちに都合のよいものになっているが、にもかかわらずそこにはキリスト教に先立つより古い文化の痕跡が刻みこまれている。

おそらく泉の信仰にはたくさんのバージョンがあつただろう。たとえばメリュジヌの物語の場合[長谷川1997]にもそうであったように、記述され伝えられた物語は文字をもつ者の手で後から紙に書き遺されたものである。口頭伝承の中には教会や修道士を嘲笑う滑稽譚もあつただろう。しかしそうしたものはほとんど残らず、正史として文字化されたこの聖人伝だけが残され流布したと考えられる。19世紀の聖職録が伝える聖者伝、伝説もその起源は案外と新しいのではないか。

この泉については13世紀の記述があり、それによるとこの地には「あちこちから病人がやってきていた」が、「彼らは熱に苦しめられている者たちであり、健康を取り戻してくれる奇跡水une eau miraculeuseを近くの泉から汲んでいた」とある。水の効能がまず知られていたのか、聖者伝の成立がこの水の効用を広めたのか、どちらが先かはわからない。しかし泉への信仰がなければ、どれほどの信者をここに惹きつけることができたであろうか。もっともこの水は万能ではなく、1610年にペストが流行ったときには、この修道院の修道士二人とその使用人の一人が亡くなっている。泉の水といえども、流行り病には全く助けにならなかつたのである。

ちなみに、この泉は実在し、現在は図4にみるように、鉄製の導管がつけられ、コンクリート製のシンクも置かれている。この設えは素材からみてもそれほど古いものではないだろう。20世紀になってもこの水を汲みに来る人々がいたということである。わずかながら湧水はいまも枯れずに流れている。

二. 巡礼の歴史研究

さて、次に、巡礼の歴史学研究の起源と特徴について触れておこう。

ローマやエルサレムなど、キリスト教の殉教者や聖人の墓、聖書のゆかりの地を探し求めて、祈りをささげる巡礼の起源は古い。古代にまでさかのぼる。しかしこうした輝かしい聖地は、実際には遠すぎて、巡礼に出るには生活の拠点を長期間留守にしなければならない。再び同じところに帰ってくることができるのかどうか、それも定かではない。こうした大きな旅をすることができたのは、よほどの金持ちか、托鉢によって生きる修道士や聖職者であり、あるいは放浪者や遍歴職人、芸人などである。

近世期になると、しかし印刷本により地図や見聞録、マニュアル本も出回るようになり、巡礼への意欲はかき立てられていた。巡礼熱が高まるにつれ、遠い巡礼地に代わる、比較的近い巡礼地が増えていったのである。それによってようやく農民や貧しい平民にも聖地への巡礼が手の届くものになった。ロレーヌには、ジョンSionやブノワ・ヴォBenoit-Veau、スロッスSoulosseのような中世から知られる比較的大きな聖地もあるが、一



図4 隠者の館近くの泉

方には、無数の小さな聖地も存在した。実際、ロレーヌにある聖地を調査した研究によれば、ある時期に現れて、またしばらくして途絶えた後、再び巡礼地として復活した聖地もある。現在までに確認されているだけで415か所、その数は今後の調査によってはまだ増える可能性もあるという。

フランスの歴史学者が巡礼の歴史への関心を抱きはじめたのは、1980年前後のことであり、それこそ巡礼など完全に過去のものとなり忘れられてしまった後のことである。最初は人類学的な関心から現代のより新しい巡礼に目が向けられたが、過去の生きられた歴史に目を向けるアナル学派の伝統もあり、もっと古い時代の巡礼についても問い合わせられるようになった。ロレーヌ大学の歴史研究者フィリップ・マルタンは、こうした歴史人類学の進展の中で学生時代にいち早くロレーヌの過去の巡礼研究に向かった一人である。彼によれば「巡礼は、教会の概念とは異なる、個々人の願い、民衆の振る舞い方や考え方方が現れる場所である」という。

では、どうやって歴史家は過去の巡礼を知ることができるのか。研究者自身が実際に聖地に赴いて、現代の巡礼者や巡礼地の近隣に生きている

人たちに触れ、直に話してみることが不可欠なことは言うまでもない。しかし現代のありようをみるだけでは過去のことはわからない。手がかりとなるのは、まずは裁判史料、司教巡察の記録、司書き残したもの、聖職録登録簿、会計簿、遺言書など、社会史のおなじみの文献である。加えて、1620-1630年頃から多数出版されるようになった巡礼のマニュアル本やお祈りのためのリーフレット、聖人に関する物語も貴重な史料となる。また19世紀の民俗学者によって採集された情報も決して無視できない。

研究者は、こうした文献史料に真摯に向き合うことが大切である。たとえその内容が歴史的な事実とは異なっていても、ある種の伝統や習慣と伝説とを混同したようなものであっても、それ自体が人々のイメージネールな世界を映し出すものだからである。また文字記述が直接語っていることだけなく、その紙の色やかたち、素材にも目を向け、その運用や利用のされ方を想像してみることも不可欠であろう。

巡礼研究において、最終的にめざされていたのはではどのようなことだったのか。言うまでもなくそれは、聖人や建造物の一覧表をつくることではない。巡礼者の行為を微細に把握し描けばよいということでもない。マルタンの言葉を借りれば、それは「男や女が、秘跡や祈りを求めてその居住地を離れ、聖地をめざし、しづしづたくさんの危険にも出会う、そのことが生み出す詩的鍊金術のさまを描くこと」だという。「詩的鍊金術」とはおもしろい表現であるが、事の本質をよく言い表している。次に紹介するサンクチュエール・ア・レピ（未洗礼死産児の奇跡洗礼）もまさに奇跡を求める民衆の「詩的鍊金術」の実践の典型というべき事例である。

しかし、ならば民衆の夢や希望をただ探りだせばよいのかというとそうでもないのではないか。問題は、それを生み出す社会背景を明らかにしつつ考えることであり、人々の感じ考えるその心性がどういう諸状況の中で生まれてきたものかを明らかにしていくことである。巡礼という現象がどの時代にもありうる普遍的な営みであると知る一方で、常に変化し動いていく歴史的な現象でもあるとみなす視点が必要である。巡礼の歴史学研究は、民俗学や人類学と協力しつつも時間や権力との関わりを見失うことはない。社会変動との連関を考え続けるだろう。それこそが歴史学の面白さであり、また醍醐味でもあるからである。

三. 巡礼地アヴィオットのサンクチュエール・ア・レピ

さて、近世期のロレーヌでは、サンクチュエール・ア・レピと呼ばれる儀礼がさかんであった。これは洗礼を受けずに亡くなった子どもを聖地に運び、祈り、聖人のとりなしによって束の間、命の兆候が表れるのを待ってから洗礼を施すという儀礼である。近世社会史家のジャック・ジェリスによれば、これは14~19世紀にフランドル、ピカルディ、アルザス、ロレーヌ、ブルゴーニュ、サヴォワ、プロヴァンス、オーヴェルニュなどで行われていたのが確認されている。19世紀末以降、急速にその実践は衰退し忘れられていったが、現在までその歴史が伝えら確認されているだけでも、フランスで260個所あり、ベルギー、南ドイツ、ライン地方、イス、オーストリア南部、イタリアでも数十か所ある。ロレーヌ地方にはとくに多数の痕跡が確認されている。

この慣行はおそらく、ローマ教会の影響下にあるカトリック圏に共通して見られたものであろう。ジェリスは、この頻繁さは「ヨーロッパの民間信仰 la religion populaire のもっとも持続的で、もっとも奥の深い、またも



図5 二人の巡礼者
(Jacques Callot, Les Gueux,
Nancy 1622)

つとも内に秘められた顕れのひとつである⁸」と述べている。彼のいう民間信仰がキリスト教との連関においてどのような位置にあるか、この点、詳しくは述べられていない。しかしそれは単なるシンクレティズムやアマルガムでもなく、この時代のより複雑で錯綜した心性の顕れでもあるだろう。

ロレーヌの場合には、ノートル・ダム、ヨセフ、キリストの名を冠した礼拝堂や彫像、谷あいの小さな礼拝堂や隠者の家がその奇跡をもたらす聖所と考えられた。ジョンやアヴィオットのような比較的大きな有名な巡礼地はよく知られていた。（図6参照）なぜロレーヌにはサンクチュエール・ア・レピの痕跡が多く残されているのか。フランスへの遅い併合（1766年）により、ガリカニスムの影響を免れ、従来の慣習が保たれる一方で、30年戦争などによる荒廃が、カトリック司教の働きかけを困難にし、規範の浸透が緩慢であったことはたしかである。単一の原因をあげることはできないが、この地域の地理的、政治的特殊性、中間地帯による錯綜した状況が密接に関わっていたことは否定できない。それは同時に、他地域では見えにくい現象がこの地域ではよりはっきりと顕現していたということでもある。

興味深いことに、ロレーヌにはこの儀式に自ら関わり記録を残した司祭がいた。ロレーヌの北端アヴィオットにあるノートル・ダム教会の司祭ジャン・ドロテル Jean Delhotel である。彼は1668年にアヴィオットのノートルダム教会の現状についての覚書『Bref Recueil』とそれに付属する二つの補足を残した。執筆の目的は、30年戦争で疲弊したこの地域の、教会にまつわる古くからの言われ、歴史、現状を書きとめることにあり、それによって広く教会の歴史を信者に知らしめ、この教会の守護聖人である聖母マリアへの巡礼者への献身を集めることにあった。具体的には、聖母マリアとその祈りの意味、施療院の歴史と現状、ブローの領主と教会の関係、戦争による被害の状況、アヴィオットの名前の由来、聖母マリアの加護による未洗礼児の洗礼の実践、および命の徵候の重要性、教会建立の経緯やお布施、寄付その他の収入のこと、日々の祈りや祭日、鐘やオルガンのこと、住民への祈りの勧め、司祭や助役司祭、収入役や管理人の務め、奇跡、恩寵に関わることなど多岐にわたる。この覚書に付随する二つの補遺に、サンクチュエール・ア・レピによって洗礼を受けた子どものリストと、1237～1668年の間の歴代司祭の略歴、事蹟が記されている。

ドロテル（1597年頃、アヴィオット生）は、10歳で母と死別、学費を得てルーヴアンの学校に学ぶ。1623年にこの教会の財産管理参事会の会員となり、1625年には収入役を務める。1636年に前任の司祭が亡くなると、ブローの領主の推薦を受けてこれを引き継ぐのであるが、それはちょうど30年戦争にまきこまれていく悲惨な時期と重なる。彼の任務は戦争によって疲弊した教会とその活動を再建し、復興させることにあった。つまり失われた教会の規則や教会法、慣習法を記憶や聞き取りによって復元し曖昧になった土地の標石を建て直すことであった。

記録されている奇跡の事例は、1625年から1673年の50年間で138例である。決して多いとは言えない。洗礼は慎重に行われたのだろうか。1656年までは、全部合わせても年間10件を超えていない。翌1657年はフランス軍がモンメディ工を占領した年であり、ピレネー条約によって、以後この地が正式にフランス領に入る。その後は比較的安定した時期であり、1678年までは年平均せいぜい7～8件、多くても12を超えていない。運ばれてきた未洗礼死産児のすべてに奇跡がなされたのだろうか。奇跡が起こらなかった場合については記録されていないので、洗礼にまで至った死産児が運ばれてきた死産児の中でどのくらいの割合をしめていたのかはわからない。

ドロテルの記録から運ばれてきた死産児の出身地をみてみると、この教会にはその近隣からだけでなく、比較的遠距離の地域を含む各地から運ばれていたことがわかる。アヴィオットはよく知られた巡礼地であったからもある。運んできたのは、子どもの父親、母親、居住地の近隣の女、産婆などである。産婆がいつもいたわけではない。たいていは母親の居住地近くの知り合いの女であり、中には自分の洗礼の有効性を信じてもらえないがゆえに連れてきたと述べた者もいた。この産婆は誓約した産婆ではなかった。

ここに到着した死産児は、教会内部のノートル・ダムの奇跡像の足元に、季節に関係なく裸にして置かれた。鐘が鳴らされ、運んできた人と居合わせた巡礼者がともにその儀式を見守る。全員が祈りを捧げ、サヴェ・レジーナが歌われ、聖母マリアに捧げる連祷がそれに続く。やがて聖人のとりなしによって、子どもの死体に「命の徵候」が現れる。ドロテルのリストに記されている「命の徵候」とは、顔の紅潮、瞼の開閉、体温の上昇、唇の赤み、排尿や血液、体液、汗の流れ、鼓動や静脈の震え、手や足の動き、鼻の両脇の赤み、額の紅



図4 ノートル・ダム教会
(アヴィオット) 円柱のに
描かれた洗礼の光景
(撮影: 長谷川)

斑、四肢の震え、肌の赤み、自然な肌色……等々、しかし息をしたり、声を発するところまでは期待されていない。子どもが生き返ることはなかつたし、それが求められていたわけでもない。「命の兆候」が確認されると、ただちに洗礼が行われる。洗礼が終わるとすぐに兆候は消えていき、死体はアヴィオットの墓地に埋められた。

ここでは死はいったん宙づりにされている。ジェリスの表現を借りれば、「時間は逃れ難い識闘seuilを束の間、逆方向に乗りこえて進む」¹。ここでは死は時間とともに進み、中断され、立ち止まり、逆行することもありうる。Sanctuaireとは聖域のことであり、répitは「中断」「小休止」「休息」「休憩」を意味する。ラテン語のrespectus（後ろを眺めること）からきている。したがって直訳すれば「休止にある聖域」となる。子供はたとえ死んで生まれても、聖人や聖母の加護、とりなし、仲介によって、一時的に死を免れ、命を取り戻し、洗礼を受けることができるというのである。

サンクチュエール・ア・レピというこの奇妙な奇跡儀礼に対して、では教会はいかなる態度をとったのか。最初は曖昧であったが、やがて奇跡を装った誤謬、虚偽の証言の濫用にもつながるという理由から強く警戒し、高位聖職者である司教たちからは忌わしい慣行とみなされるようになった。17世紀後半になると、各地の教会会議がこの儀礼を「幻想である」「ペテンである」と断定し、繰り返し禁令を発するようになる。

しかし現実には、度重なる禁令にもかかわらず、この信仰、実践は根強く行われ続けた。たとえば、トゥールの教会裁判所の記録に、次のような事件が記されている。……ある女の行った洗礼に疑いがかかる、調査が始まったが、その結果、二人の代母が数ヶ月も前に死んだ子供の骸骨に洗礼を施していたという証言が得られた。その地の墓掘り人も、教会の回廊の庭にある「花園」と呼ばれる場所に少なくとも20の子供の死体を埋めたと証言した。しかも堪えがたいほどの強い汚臭を除けば、その骸には「いかなる<命の兆候>もみられなかった」という証言もあった。このような教会の摘発は跡を絶たず、禁令によつても収まることはなかつたのである。摘発はますます強まっていったが、ある場所で禁止が強化されれば、別の場所に移つてなされるという具合であり、言うなれば「モグラたたき」状態にあり、いくら禁じても人々の慣行は止まるところを知らなかつたのである。

やがて1658年トゥールの司教は、乳児の埋葬には正しく洗礼の行われたことを示す少なくとも4人の署名入りの証明書が必要であると命じた。そして20年後のジャック・ド・フー司教の時代になるとこの儀礼は完全に禁じられた。18世紀に入ると、いよいよ迷信的慣行として貶められ、これに加担した聖職者は聖職録停止の厳罰処分を受けるようになった。

サンクチュエール・ア・レピが広汎に行われていた背景には、トレント公会議以降の教会の習俗の矯正、教義の内面化というカトリックの改革運動の積極的な働きかけ、禁令の強化があることは疑いえない。出産時やその数日後に亡くなつた子どもに洗礼ができなくなり、未洗礼死産児が村や教区の墓地にそれまで通り埋葬できなくなったことが、直接的な原動力になっていると考えられる。30年戦争による生活全般の疲弊は、人々の救靈への願いを一定程度強めていたかもしれない。しかし彼らが求めていたのは、純粹に子どもの救靈そのものであったというよりも、むしろ墓地への埋葬ではなかつたか。たしかにアヴィオットでは、未洗礼死産児は遠くからも運ばれてきていたから、洗礼後は生地に戻されずにそこに埋葬されている。しかしこれはアヴィオットのような巡礼地の場合であり、多くは居住地近くの聖地に運び、洗礼を行つて居住地の墓地に埋葬したと考えられる。ロレーヌの無数の聖地はこうした奇跡洗礼のための場所でもあったにちがいない。

* * *

聖地が必要とされまた巡礼がさかんであったのは、せいぜい19世紀半ばまでのことであり、おそらく19世紀の終わりに大きな断絶があったと考えられる。その後20世紀に入ると、巡礼は農村でも急速に衰退し、司祭も大部分が巡礼を無視するようになっていく。1930年代には、平和の祈願など共同体で催す特別なイベントのときに企画され想起されるのみとなつた。

1 Martin, Philippe *Pèlerins de Lorraine*, Éditions Serpenoise, Metz, 1997, p.9 より。

2 ムーズ県ヴエルダンの南西数十キロに位置する。(本稿末図6参照)。フランス語の地名ボリュウ・アン・ナルゴンヌ BEAULIEU-EN-ARGONNEは「アルゴンヌの美し地」を意味する。

3 Martin, *Ibid.*

4 *Entre la légende et la réalité: Saint Rouin*, <http://legende-et-et-realite.blogspot.com/2009/01/la-legende-saint-rouin.html>.

なお本稿に掲載した Beaulieu-en-Argonne 関連の写真はこのサイトから転載したものである。

5 たとえば、クロエ司教の教会史 Abbé Clouet, *Histoire ecclésiastique de la province de Trèves et des pays limitrophes*.

1844, Tome1, pp. 610-615や、19世紀末の隠者の館についてヴェルダンの司教ロビネが記した土地や聖職録についての記録 Abbé Robinet. Pouillé du Diocèse de Verdun - Ermitage de Saint-Rouin ou de Bonneval, 1888, pp.680-683、さらにはサン・ルアンのアイルランド出身説を裏付ける英語の教会関係の書物 John Lanigan, *Ecclésiastical History of Ireland [etc.]* 1829, tome 2, pp.491-492 等々。

6 ただしサイトの原文では、物語はすべて直接法で記されている。しかしこれはそもそも伝承/伝説であり現実ではない。フランス語の抜粋にあたっては、実際に起きたかどうかが定かでない過去の出来事を推量する際に用いる条件法過去形に置換した。

7 メロピンガー朝時代のフランク王国東部の分国、現在のベルギーを含むライン川西岸地域。

8 原文は以下。… une des manifestations les plus durables, les plus profondes et en même temps les plus secrètes de la religion populaire en Europe occidentale.」 [Gélis, 1984, p.510]

9 原文は以下。 Le temps de franchir ainsi en un instant en sens inverse, le seuil fatidique. [Gélis, 1988]

参考文献

Delhotel, Jean, *Bref Recueil : de l'Etat de l'Eglise Notre-Dame d'Avioth*, Colmar, Éditions A.A.E.P., Ingersheim (1668/1981).

Deux suppléments au Bref Recueil de l'Etat de l'Eglise Notre-Dame d'Avioth, Colmar, Éditions A.A.E.P., Ingersheim (1668/1992).

* * *

Châtellier, Louis, *La religion des pauvres : les missions rurales en Europe et la formation du catholicisme moderne, XVIe-XIXe siècle*, Paris, Aubier, 1993.

Gélis, Jacques, *La sage-femme ou le médecin : Une nouvelle conception de la vie*, Paris, Fayard, 1988.

Martin, Philippe, *Pèlerins de Lorraine*, Metz, Éditions Serpenoise, 1997.

長谷川まゆ帆、「森と泉の妖精メリュジーヌ—異界・女・生と死」『未来の中の中世』東大出版会、1997年、111-121頁。

「バロック期のジェンダーと身体—国境地帯ロレーヌより考える—」『岩波講座世界歴史16 主権国家と啓蒙』岩波書店、1999年、195-221頁。

「未洗礼死産児の洗礼と埋葬—Avioth の司祭 Jean Delhotel の覚書を中心に—」平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)）研究成果報告書 研究代表者 二宮宏之、研究課題「ヨーロッパの基層文化の研究—フランスを中心に—」（研究課題番号10041037）2001年、7-14頁。

図6 ロレーヌ地方の主要な巡礼地



典拠 : Martin, Philippe, *Pèlerins de Lorraine*, Éditions Serpenoise, Metz, 1997, p.8.